



わっ！マイクロバスが来た。

(1月)

10年間お世話になったマイクロバスが廃車となり、関係者一同頭を悩ませていたところ、新しいマイクロバスが寄贈されることに決定。そして、1月にピッカピカのマイクロバスが納車され、さっそく旅行・水泳教室・ドライブに大活躍!!



昼食の時、成人病のK君は、少し緊張気味で席についていたが、やがてみそ汁を一口飲むと「ムッ」とした顔でこちらを覗んできた。減塩中なので味が不満らしい。

肥満対策中のHちゃんも、おやつの時、片手にグチャグチャの最中を握りしめていたことがあった。二個ずつ配られていた最中だったが減量の為一個に減らされようとしたので必死でとられまいとした結果だった。

院生の肥満増加や高齢化にもない生じてくる多くの問題を、栄養学的又は、医療的見地に立って、解決していこうとした時、健康管理上の意味を含めて、いわゆる「満足」のいく食事のあり方に難点を残すようである。彼らにとって食事は最大の楽しみでもあり関心事でもあるので、個々毎食事に満足いく食事であれば良いのだがなかなかそうもいかない。

それに学院では、ほとんど集団で食事をとっている。適正な栄養や嗜好を配慮すると同時に、食堂での雰囲気についても特に考慮したものだ。

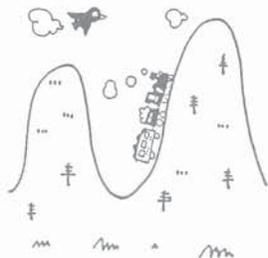
(S)

初心



彦坂 健一郎

西友ストア二宮店の素心学院展示会場で受付をしている時の事です。近くの電気製品の売り場では日本シリーズ第一戦の様子がテレビに映し出されていました。気が付くと、二人連れのラフな服装をした若い男性が入ってきて、絵や陶器を見ていました。一人は黒人で連れの人が英語で説明をしています。しばらく展示物を見た後、連れの人が寄つて来て、「この催しはどういうことか?」「私たちが何をすればいいか?」と聞いて来ました。詳しく話をしてみると、黒人の友だちが言うには、「自分は日本に来て大変に世話になったお礼に何かしたい。今私は何をすればいいか。今私に出来る事は何か?」と言っているのだそうです。——「今私に出来る事は何か?」いかにも英語の直訳らしいこ



の言葉を聞いて、「オヤッ」と心の中を動かされる何かを感じました。私にとっては懐かしい、どうしようもなく懐かしい言葉だったので。そして又、とても新鮮なひびきを持って聞こえたのです。随分昔になります……もう十年以上も昔のこと。「安保ハンタイ!」「沖繩ダツカン!」などと騒がし

正月旅行

白銀に招かれて……

平山 洋子

おとしまでは伊豆方面ばかりであった正月旅行先を、雪国行にかえてから二度目。今年はまだま、暖かい大磯にも、何度が雪が降り、我々も度々お目にかかることができたが、去年までは、そうではなかった為、みんなに雪の中で遊ばせてあげたいということも行先が変わった一つの理由であったと思う。

寒さに負けず、雪合戦やそり、スキーで楽しむみんな、外が寒いだけに、部屋の中の暖かさが身にしみ、それだけで、うれしくなっています。

二泊三日という、ちよつと短い旅



行ではあるが、まる一日雪とたわむれて、そのあとは、みんなでおいしい食事をとりながら楽しいおしゃべり。去年は、院生十名、職員三名だけであった参加者が、今

年は引率の職員三名の他に、浅見ファミリー三名、渡部先生、鷹栖先生、大貫先生、総勢十九名のにぎやか旅行になりました。途中少しだけ田代ファミリーも加わり、一層にぎやかが増しました。

宿の人達も二回目ということもあり、よくわかってくれていて、いろいろよくもってらしていました。みんな又来年も行きたいといっているくらいです。岡島君と山森君のスキーの腕前も大分上達して、岡

▼新人です、ハイ。体力だけで勝負していたのに、エンピツなんぞ持つは初めてになりあつた! 編集後記が最初で最後のお仕事にならぬよう、これから指も鍛えねば……



▼カラスが二羽、川向こうの木にとまっていた。時々、首を振りながら「カーカー!」と二、三度鳴いている。この前、畑にやっとなってきたサヤエンドウの新芽を全部食べたヤツだ。きつとそうに違いない。僕は、ムシヤクシヤしながら石を投げた。「あ!」……はずれた。

▼全国減塩志願の方々、春から夏にかけては減量の成功しやすい時なのです。夏の白い砂浜・

島君の方はリフトに乗って、上から滑ってこれるくらいになりました。滑れるといっても、こんなでる時間と滑ってる時間と同じ位ですが、山森君は、まだリフトにこそ乗れませんでした。下の方で一人黙々と練習して、ずいぶんうまくなった様です。どちらかというと女子より男子の方が楽しんでいました。

来年もきつと又楽しい旅行ができるといいな。

森の中のテニスコートにびつたり合う姿を目ざしがんばろう……目標は高く!

▼第三号いかがでしたか? 先日Iさんからとてもイイ話を聞きました。散髪を嫌がる院生を散髪するのに、職員は力

▼そして発行は——
神奈川県中郡大磯町虫窪24
電話0463-71-1255
社会福祉法人 素心会
素心学院
施設長 田代 哲郎
でした。

理事会の動き

◇予算理事会開催
去る3月17日(土)に第72回の素心学院理事会が、東京の恒陽社会議室において開かれた。

当日は8名の役員の出席のもとで昭和59年度の事業計画と予算案が審議、承認されました。会場の恒陽社は福田理事が経営されている印刷会社で、理事会の終了後に最新式の大形印刷機などを見学させていただきました。国鉄駅の大形ポスターが大変美しく、大量に印刷されていました。

後援会コーナー

◇学院清掃奉仕実施報告
去る2月19日に後援会員による「清掃と学院の給食を食べる会」が行なわれました。

当日は、午前10時より11名の参加者で男女の浴室の掃除を実施しました。排水溝の中や、浴槽のふたなどもすっかりきれいになりました。

そのあと学院の給食をとり、午後の座談会に移りました。この話し合いには役員の方や保護者会の方の参加があり、今後の後援会活動の方向や目的について、熱っぽく議論が行なわれました。結局3

月20日に役員会を開き、任期切れになっていく役員改選の件と、今後の具体的取り組みについて話し合い、4月に総会を開く事が確認されました。会長の水沢さんより、活動内容を①会員増強、②奉仕活動、③事業活動の3つという組織を再編成してはどうかという提案があり、検討してゆくことになりました。事務局担当

(右記の件について、4月13日の総会で決定され、各委員会が活発な活動が開始されました。)



〈後援会加入のお誘い〉

私達は素心学院の活動を側面より援助し、わずかでも障害者の福祉に寄与できたらという主旨で、後援会を運営しております。

多くの皆様にご理解とご協力をいただけたらと思います、ここにご案内申し上げる次第です。

●主な活動内容

1. 素心学院新聞の郵送(年2回)
 2. 事業報告及び会計報告(年1回)
 3. ボランティア活動及び親睦会(年1~2回)
 4. 資金集めのための事業
- 会費は年額一口1,000円です。
案内書をお送りいたしますので、

後援会事務局(素心学院内)彦坂までご連絡下さい。

素心学院 後援会会長 水沢孝幸

●事務局

〒259-01 神奈川県中部大磯町虫塚24
TEL.0463-71-1255 素心学院内

想うこと

岡崎 楚代

創刊号を見てハッといたしました。素心学院に行くようになってから9年目になりました。

守永の兄上のお話を聞いてお話し出来ればと、ビクビクしながら二・三ヶ月で少し慣れてきました。先生方の御苦労もわかり、子供たちも慣れて「先生ケイ食べたいよ」と言うようになって、お菓子の箱をかかえて来て、だんだん教える事も体得しました。先頃ヨーロッパの先生で目の不自由な子供に「ハート」を教える為、始め枯葉のようなカサカサした物をさわらせ、次に暖かい綿・ビロロのような物をさわらせて、それらの物を抱きしめさせて、物に「ハート」がある事と心を感じさせて

せていました。また、そうすることによって自閉症のような子供を治されたのを見てまいりました。この学院でも、先生方のお骨折りがだんだん子供たちにも、わかってくるように思われます。一昨年から、カロリーの事を考えて、お茶の時間を減らし、折り紙やお節句や七夕の季節にあったお人形や、色糸で刺す刺し子作りを始めました。これは、子供たちの太りすぎをおさえる為です。私も元気な時は、毎週楽しくお手伝いをさせていただいております。東京から大磯まで来てと大変良い空気で清々しいのが何より結構だと存じております。

★岡崎先生には、毎週火曜日お茶・お花クラブの講師として、御指導していただいております。

バザー報告

昭和58年11月27日(日)に、第10回目のバザーが平塚農業会館において開かれました。天候に恵まれ、423名の入場者があり、一七六、九一九円の利益がありました。第10回という区切りの意味も含め、平塚農業会館におけるバザーは、今回でお休みとすることにしました。新年度からは新しい形のバザーをめざして再スタートします。当日お手伝いをいただいた方をはじめ、いろいろな形で応援して下さいました。皆様、ほんとうにありがとうございました。素心学院保護者会・後援会



(お花クラブのひとこま)



お玉さんのこと

滝沢 正一

お玉さんは、丸くて偏平な感じで、笑うと顔がくしゃくしゃになりなんとなく愛嬌のある人である。余り怒った顔は見た事がない。身長は普通であろうが横巾のある

川口賀子さん

川口さんは、今年4月から新しく素心学院の一員になりました。さっそく実習A班の洗濯グループに入り、洗濯物干しと取りこむ仕事にがんばっています。



ちよつとインタビュアー
●好きな食物は……
●好きなことは……
●好きなこと……
●好きなこと……

●好きなこと……
●好きなこと……
●好きなこと……
●好きなこと……

砂場作り

東海大学ワークキャンプ

私達ワークキャンプは、昨年12月18日から22日までの5日間で素心学院のグラウンドに砂場を作った。少し前かがみのように感じられた。幼児性が残り乍ら言語においては、おめえ、おらあとか言う言葉が出て何となくなじみ深さを感じ、彼女が心の病に冒されるとは……

ここ数年よく泣く事があった様には思ったが、何もしてやる事の出来ないもどかしさのみ残る。よく人は、馬鹿と利口は紙一重と言うが、そして病にかかる人も何種類かに大別出来るように思うが、彼われは、今でもふと、おめえと行くだよ、と言う声が聞こえてくる様である。

★お玉さんこと林玉江さんは昭和59年3月素心学院を退所しました。

成人おめでとう

1月15日、素心学院では二名が成人式を迎えました。
佐野竹彦君(作業A班)
瀬川鉄也君(作業C班)

だが、印象に残っていることを、思い出しながら書いてみたい。

(中略)
砂場に入れる砂の砂取りが重労働でこれが最もきつかった。深夜で人を避けるようにして砂利と石を大学近くの金目川から3回、砂を海岸から3回トラックで運んで来たが、特に砂はトラックに入れるのに、バケツに一杯ずつと入れてるので、大変な重労働であった。

「まあちゃん、最近いい子になったね。」って言うと、舌を出し顔をクシャクシャにしてテレまくるまあちゃん。ほんとにここ何年かで随分落ち着いてきたのです。

まだまあちゃんが小さい時、家中は戦争でした。ちよつと目を離すと、モノレールの方へ一人でお散歩。捜しに行くにも一苦労でした。またちよつと気に入らないことがあるとガラスをバチャーン。何十枚割ったかわからないくらい。今思うと、よくくけが一つなくガラスを割れたかと感心するくらいです。夜は遅いし、朝は早い、それに持病の喘息。あの時期、両親はとても大変だったと思います。

最近、カセットでは演歌を聞き、テレビはNHKを静かに見ている。なかなかの文化人なのです。ハイ。家族でカラオケをすれば、ニッコニコしながら聞いています。時には、ちゃめつけを出して、ペランダから屋根へひよっつ

砂場を完成することが出来てもうれしかった事は、これが計画だけに終らず、最後までやり通す事が出来たという事である。これは、クラブにとって大きな自信となつたので、これからは学院からクラブに何か要望があれば応えていきたいし、それを実現する事が出来るようにしていきたいと思っております。

東海大学ワークキャンプのみなさんご苦労様でした。

父兄ペンリレー 私のお兄ちゃん

早川 薫



出たりして……でも昔と比べれば、とっても落ちついてきています。私たちが言うことは何でも理解するし……時々、ほんとは、しゃべれるのではないかと疑ってしまうほどです。
小さい時、近所の友達や兄弟で自転車を乗り回したりして遊んでいたのを見て、いいなあ……って恨やましく思い、どうして私のお兄ちゃんだけが……って思った時期がありました。でも今思うと、他の人には経験できないことを、経験することができたし、これからは、勉強になることを経験すると思えます。しゃべることは教えてくれる、私にいろいろなことを教えてくれる。やっぱり……ヨイショしすぎかな!!



(完成した砂場)

ものをくふ時」
というのである。

人は社会をつくる。深山幽谷に
ただ一人で仙人のような生活を送
ることは、現代では稀有としか云
いようがない。しかしながら同じ
社会生活でも独り暮らしもあるし、
家族生活もある。又多数の人が集
団生活する場合もある。ところが
その集団生活にも色々あって、個
々の人が何等の拘束も受けて自由
に振るまえる場合と、ある目的の
ために拘束されて日常生活にも管
理者の監視を受ける場合もある。
私共が社会生活に於て普通仕合
せと思うことは、家族揃って健康
で、平和な生活を送ることであろ
う。江戸末期の歌人橋嘯寛の歌に
「たのしみは
妻子むつまじく
うちつどひ
頭ならべて

私は不思議なことに今日までの
間に、何度かきびしい拘束を受け
た集団生活を体験している。どう
いう理由か今でもわからないが、
私は生まれるとすぐに隣家の人と
打ち合せがあって、隣家の門前に
籠に入れて捨てられていた。隣人
はずぐ拾い上げて数日間養った上
返してくれた。何かの縁起をかつ
いだのであろう。私はこの世のス
タートから数奇な運命に捧られる
ことが約束されていた。
十五才で市ヶ谷にある陸軍将校
を養成する学校に入る。結局は
戦場を目標とするきびしい集団教
育を受けた。四年後には方針を変
更して旧制高校に転校したが、大
学を卒業すると再び陸軍幹部候補
生として当時の歩兵第一聯隊に入
隊し、普通の兵隊さんの中に入っ
て十ヶ月の軍事教育を受けた。



インド人の生活に学ぶもの

田代哲郎

インドへ行って来た。
この広い世界の中で何故、インド
を選んだのだろう。
インド行きが決まるまでの、私の
インドに対するイメージは次のよ
うなものであった。
まず、気候的に暖かい（あるいは
暑い）国である。
次に人間が人間として算ばれ、
動物や自然を大切にしており、こ
のことは、長い歴史の中で哲学的
宗教的風土にささえられている。
また、住む人々は、あまり物ご
とにこだわらず、のんびりとした
生活を営んでいるが、経済的には

日本ほど豊かではない。……等々
……
私達が日頃まずまず満たされた
日常生活を送る中で、今一つ何か
満たされぬもの、精神的な何か、
我々が遠く忘れ去った何か、がイ
ンドという国にはあるのではない
か、とさえ、期待したのであった。

10日間の見聞ではあったが我々
に飛び込んだインドの様態は強烈
であった。
まずは人の多きである。
日本でも人口は多いし、東京でも
大阪でも人であふれている。



(Photo 投野)

管理する人 される人 守永義輔 (素心会理事長)

第三回目は日支変の最中昭和
十六年七月に所謂赤紙召集を受け、
遠く北満の人里離れた部隊で戦争
準備に明け暮れし、遂に十二月に
は大東亜戦争に巻き込まれたので
ある。
四年後には終戦を迎えやれやれ
と四年間もあらばこそ、延々シベ
リヤ鉄道を貨車で揺られウラルを
越え、ソ連タール州昔の歴史に



出でくるダツタン地区にある小寒
村エラカの収容所に移り、以来
二年余に渉り飢餓と酷寒の自然と
闘う集団生活を送ることになった。
ソ連の収容所はどこでも大体同
じであるが、鉄条網に囲まれ監視
台には自動小銃を持つ歩哨が立ち、
労働以外に門外に出ることはな
かった。そのような環境の中でも大
悟徹底、余裕綽々のさむらいがい

て、壁新聞には秀でた川柳が顔を
出していた。
わが物と思えば軽し粥の皿
ひがも眼にゲルマン(太り)
捕虜二年士気即是喰うけり
悟りけり
東風吹けど綻ぶものは
靴とシヤツ
あと何度見るのかなあと
いい月夜
日本に帰還後間もなく熊本県に
在る工場に赴任したが、ここには
併設された紡績工場勤務の女子工
員の寄宿舎があった。私は工場と
共に寄宿舎管理の責任者となつた
のである。今や女工哀史は昔の物
語りで、診療所には専任の医師、
炊事場には栄養士が活動していた。
これに加えて経歴深い舎監が相談
相手となり、音楽・生花の先生も

舎監が頭を抱える問題も少なく
かつたようである。
私は現在精神薄弱者更生施設経
営の責任者となつているが、この
施設は障害者の生活基盤であるこ
とが特異の環境であり、これにふ
さわしい管理体制が設けられてい
る。即ち、単に毎日を生きてとい
うだけでなく療育という附加条件
がついている。この舞台は生き抜
こうとする力と命の尊さを実感で
知る人の共感と愛情の溶け合った
道場と考えるべきではないか。
糸賀一雄先生は名著「福祉の思
想」の中で、「施設は家庭にかわる
ものという機能を果たすだけでは
なく、施設という集団生活のなか
で個の人格が形成される。これ
は施設の職員と人間関係のなか
で達成されるのであるから、職員
の不断の人格形成と無関係では
ない」と説かれていることは感銘深
い名言である。

しかしインドのそれは数字で表
わされない中身の問題である。
一見して、何の目的もなく街に
いる人々でごったがえしているか
のように見える。
老人や子供、失業者や障害者、
そしてビジネスマン的な人々も交
つているが、ヒマそうな人々が圧
倒的に多いように見える。
歩道から湧き出る水（水道か？
あちらこちらにある。）で体を洗
っている男、洗濯している女、下
の子供を抱っこした女の子、何も
しないでじっと見ている人、急い
で歩いていく人……。
それに牛をはじめとする色々な
動物たちもウロついている。
また車道は、人力車、乗用三輪
車、乗用車、バス、トラック、大
八車まで、交通規則など無いかの
ように走り廻っている。
何もかも整理してしまつた日本
の街には、こんな情景はない。
また、この国の貧乏なのも驚き
であった。

着ているもの、使っている道具、
走っている車やバス、何を見ても
もう日本人には粗大ゴミ置き場
も見つからないような物が活躍
している。
インド国鉄自慢の「タジ、エキ
スプレス」という特急列車も古い
車輛で、日本の赤字国鉄でも廃車
だろう。
インドで見ると何もかもが驚きで
あった。
それは日本と違う文化文明の地
ということでもあったかもしれない。
が、人間の営みとして見ると
強烈な印象である。
貧困と渾沌さが、インドの長い
歴史や宗教哲学とどのような関わ
りを持つのかよく解らないし、今



マザーテレサの施設の前で給食サービスを待つ人々

後、飢え死する人がいる国になつ
ていくのか、日本のように物質的
に豊かで表面的には整然とした国
になつていくのか解らない。
日本人である私がインドの生活
を見て感じたのは、その良し悪し
は別として、「日本は何もかも整
理しすぎてしまつた」ということ
である。
何かを整理する時、一見多数の
人達には不必要で価値の低いと思
われるものは姿を消していく運命
にある。
★新任職員
大塚 早苗 (調理)
倉田 新 (基礎訓練班)
鷹栖 幹雄 (基礎訓練班)
小林 里子 (作業A班)
大井 真弓 (基礎訓練班)
土井 直樹 (作業C班)
安藤 美保子 (実習B班)
各務 雅義 (作業A班)
平山 三千代 (作業A班)
水沢 昭 (実習A班)
★退職職員
細野 正義
橋本 高美江
山中 寅年
山道 英樹
平山 洋子
小林 豊
足立 真弘
(一九八四年四月現在)
しかし本当に大切なものは、実
は、その中にある、ということば
よくある。
インド人は長い歴史の中でその
ことを良く解つているのかもしれ
ない。私の日頃の「同志」たちの
生活を思いつつ、インドで感じた
ものは、そんなことだつた。
又行くぞインド。